

荒木 優也 提出 学位申請論文（課程博士）

『西行和歌の研究―その仏教的和歌観を中心に―』 審査要旨

論文の内容の要旨

荒木優也提出論文『西行和歌の研究―その仏教的和歌観を中心に―』は、平安後期に活躍する歌人である僧西行の仏教思想に関わる和歌観についての研究である。西行は二十三歳で出家して草庵住まいをし、また諸国を行脚しながら多くの歌を詠んだ。勅撰集の『新古今和歌集』には九四首の歌が取られ、家集には『山家集』、自歌合に『御裳濯河歌合』などがある。西行は出家して法名を円位といひ、そのことから歌も出家者としての心情・思想を詠んでいるところに特質が見られる。本論文では、この西行の出家者として詠んだ和歌に焦点を当て、西行の仏教的和歌観を考察したものである。

本論文は、冒頭に「本論文の方法と概要」を置き、続いて序論（四章）、第一部（三章）、第二部（三章）、第三部（五章）、結論により構成され、論文は十五本を収録している。本論文の目的は、和歌に仏教思想を重ね詠むことよって、西行が確立し得た事物のありのままの姿（本質）を詠む方法を明らかにすることであるとする。「序論 古代和歌における仏教思想の系譜―西行和歌前史―」は、西行以前における和歌と仏教思想の関わりを史的に論じるものである。「第一章 無常落花の美―『春花の散りのまがひ』ということ―」（一、はじめに、二、落花と愛別離苦、三、落花と無常、四、おわりに）では、西行に先行して詠まれた『万葉集』後期の大伴家持に見える落花と無常感について論じる。「第二章 無常との葛藤―『悲世間無常歌』覚書―」（一、はじめに、二、世間無常の詩と歌、三、無常との葛藤、四、おわりに）では、家持の「悲世間無常歌」を取り上げて、古代に受け入れられた無常思想と、その無常との葛藤により無常の歌の形成を論じる。「第三章 仮合の悲しみと浄土信仰―仮れる身と無常思想―」（一、

はじめに、二、浄土思想の知識、三、仮合の身の悲しみ、四、おわりに)では、やはり『万葉集』の山上憶良の作品に見える、仮合の身としての存在を悲しむ無常観を取り上げ、その背後に浄土思想の存在を確認している。「第四章 歌語『あるかなきか』と空観―貫之、公任から西行へ―」(一、はじめに、二、歌語「あるかなきか」の変遷―貫之、公任から西行へ―、三、「あるかなきか」の思想的背景―和歌と空観―、四、おわりに)では、歌語として用いられる「あるかなきか」の語が平安期の歌人から西行へと展開する和歌の状況を捉えている。この序論では、仏教思想がどのように古代和歌に受容され、和歌として形成されたかを文学史上に確認し、西行和歌へと到る道筋を論じたものである。

「第一部 中世における仏教的和歌観―西行と明恵―」では、明恵と西行の和歌観を華嚴思想から比較して明恵と西行の和歌観の違いを論じるものである。

「第一章 西行と華嚴思想」(一、はじめに、二、教相判釈と和歌、三、唯心思想と西行和歌、四、おわりに)では、西行和歌から華嚴思想を読み取り、そこか

ら華嚴教学と西行和歌との関係を論じる。「第二章 明恵和歌と『華嚴唯心義』—西行への道程—」(一、はじめに、二、心と詞、三、明恵の歌学、四、和歌と法界—和歌と世界観の対応—、五、西行から明恵へ、六、おわりに)では、明恵和歌を取り上げて、そこに見られる華嚴唯心義の思想的状況を捉え、それが西行和歌との類似性や相異性を明らかにする。「第三章 山家の心中と折敷のふち—『山家心中集』卷末の構成について—」(一、はじめに、二、櫛の美の発見、三、非情からの啓示、四、歌語「折敷のふち」をめぐる歌の展開—『山家集』から『山家心中集』へ—、五、おわりに)では、西行が自らの歌集である『山家集』から抜き出した『山家心中集』の「闕伽の折敷のふち」の歌を取り上げて、この歌が『山家心中集』に改めて収められることで、新たな意義を持つ歌として再生していることを論じる。

「第二部 中世和歌と仏教思想—天人感応の詩学から西行和歌へ—」では、藤原教長・西行・慈円がそれぞれ和歌によって仏教思想と現実を重ねて行く志向の

あることを論じる。「第一章 偈頌としての和歌―藤原教長『十楽歌』の意図―」
(一、はじめに、二、「十楽歌」と『往生要集』、三、教長の歌学―天人感応の
詩学の展開―、四、偈頌としての和歌、五、おわりに)では、崇徳院の側近であ
った藤原教長の「十楽歌」の序文を取り上げて、そこには天人感応の歌学が意識
されていること、その和歌は偈頌としての性格を持つことを論じる。「第二章
『御裳濯河歌合』の形成―空海『秘密曼荼羅十住心論』との関係から―」(一、
はじめに、二、歌合と天人感応の詩学、三、西行の和歌と仏教思想、四、『御裳
濯河歌合』と神仏思想、五、おわりに)では、西行の『御裳濯河歌合』の形成の
問題を取り上げて、そこには西行の仏教思想のみではなく、神仏習合による和歌
の姿とともに神・仏・儒の相対する思想が詠まれ、その止揚として空海の十住心
体系が意識されていることを論じる。「第三章 「法華経二十八品和歌」と歌枕―
慈円『法華要文百首』考―」(一、はじめに、二、『法華経』世界と日本を重ね合
わせる、三、『法華経』と歌枕の共鳴、四、おわりに)では、「法華二十八品和歌」

の中でも、慈円の『法華要文百首』を取り上げて、そこに見える歌枕が『法華経』の故事と結びついていること、そこには国を統治する君の支配地と重なる意図の存在することを論じる。

「第三部 西行における仏教的和歌観の詠法」では、煩惱即菩提のような仏教理念を直接的に詠み込まなくとも、その歌に釈教歌的性格が十分に認められることを論じる。「第一章 花を惜しむ心―『山家心中集』二十七番歌と唯心―」（一、はじめに、二、花の種と唯心、三、『山家集』から『山家心中集』への解釈の変容、四、おわりに）では、西行の『山家心中集』に見える「花を惜しむ心」を通して、『山家集』から『山家心中集』へ到る道筋に花を惜しむ心の変容が視られることを論じる。「第二章 月に鳴く心―『聞書集』「月前郭公」歌の解釈―」（一、はじめに、二、『月前郭公』題の本意、三、釈教歌から「月前郭公」へ、四、ホトトギス歌の系譜から「月前郭公」へ、五、おわりに）では、『聞書集』に見える「月前郭公」の歌を通して釈教的性格との関係を論じる。「第三章 露

に置く心―『御裳濯河歌合』十八番左歌の解釈―（一、はじめに、二、「おほかたの露」と「涙」の対比、三、俊成判詞の意義、四、へ露に置く心と神楽歌の「朝日子」、五、おわりに）では、『御裳濯河歌合』に見える十八番左歌に付された俊成判詞の意義や、この歌と神楽歌の「朝日子」との関係を論じる。「第四章 鏡にうつる心―『人の心のうち』を捉えること―」（一、はじめに、二、『山家心中集』『月前野花』詠と「野守の鏡」、三、『聞書集』『安楽行品』詠の鏡、四、「歌の深き道」と三諦円融への道、五、おわりに）では、『山家心中集』に見える「月前野花」の歌を取り上げて、その典拠である「野守の鏡」の故事の背後に三諦円融へと繋がる世界があると論じている。「第五章 跡なき心―沙弥満誓「よのなかを」歌享受史から見る西行―」（一、はじめに、二、慈円側からの解釈、三、満誓歌の享受とその展開、四、満誓から西行へ―和歌と空観―、五、おわりに）では、『万葉集』から始まる「世の中」を詠む仏教的内容の歌の系譜をたどり、西行和歌が空観を獲得する姿を論じている。

以上の本論の後に結論が加えられて、各論のまとめと今後の課題が述べられている。

論文審査の結果の要旨

荒木優也提出論文「西行和歌の研究―その仏教的和歌観を中心に―」は、仏教思想を通して西行の和歌を考察するものである。本論文の中心とする目的は、

① 仏典を直接の典拠とする和歌において、西行が和歌の類型的表現Ⅱ（和歌の論理）を利用することによって、仏教思想を一首のうちに形象せしめようとしていることの指摘。

② 四季の自然を歌う歌の表現の繋がりに飛躍が生じている場合（Ⅱ和歌の論理のみではなぜそのような表現になるのか覆いきれない場合）、その背後に仏教思想の論理が働いており、西行が現実の世界の有様を捉えるために、

仏教の論理によって把握を試みていると解釈されることの確認。また、それが衰退していた和歌表現に対する賦活の意味を持ったことの確認。

③和歌の伝統的表現がそのまま仏教的理念を表現として読み替え得るような、多義的な表現を西行が積極的に目指しており、それは結果として、俗人が世俗性を捉える行為と、仏教者が世界の真相を捉える行為の一致を示すものとなることの確認。

の三点にあるとする。これらの問題点を通して、西行和歌の生成する状況を動的に捉えようとするのが、本論文の眼目と言える。何よりも仏典の説く仏教思想を理解し、それを元に西行の歌の性格を明らかにする真摯な努力の跡が認められる。以下に、本論文が果たした意義について、いくつかの中心となる論文から確認したい。

第一部は、明恵と西行の和歌観を華嚴思想から比較して明恵と西行の和歌観の違いを論じるものであるが、特に第一章「西行と華嚴思想」では、「明恵上人伝

記」の逸話として西行が明恵に語ったと言う和歌観を起点として、そこから西行和歌に華嚴思想が見られることを確認する。この華嚴思想は院政期の藤原俊成『久安百首』『釈教』に教相判釈（仏教經典をその相（内容）により高低・浅深を判定し解釈）の歌の一部として「唯心偈」を題とする歌が数首詠まれているが、これは華嚴宗に限らず諸宗で享受された思想であり、その結果として和歌の題に取り込まれるに至ったことを明らかにし、西行「聞書集」の「三界唯一心 心外無別法 心仏及衆生 是三无差別 ひとつ根に心の種の生ひ出でて花咲き実をば結ぶなりけり」の歌は、華嚴思想享受に依拠するものではあるが、それは唯心偈を直接に詠むものであるよりも、〈花〉と〈唯心〉とを取り合わせる和歌的論理に立脚して詠まれたものと結論する。ここでの分析や結論は穏当であり、西行和歌と仏教思想との関係が的確に捉えられている。

第二部は、藤原教長・西行・慈円がそれぞれ和歌によって仏教思想と現実を重ねる志向のあることを論じるものであるが、中世和歌と仏教思想を天人感応の詩

学と言う視座から捉え、それが西行和歌へとどのように展開したかを問う論である。特に第二章の「『御裳濯河歌合』の形成―空海『秘密曼荼羅十住心論』との関係から―」では、神宮に奉納された西行和歌は大日如来が垂迹する内宮に奉納することで神仏との関わりに主旨があり、その背後に空海の『秘密曼荼羅十住心論』の思想があつたであろうこと、諸宗派の隔たりを超えた融即的境地に立つて、いま目の前にある自然をそのまま浄土に転位せしめる視点を産み出し、和歌による神仏感応によりそれを現出させようとする試みであつたことを指摘する。この第二部では藤原教長・西行・慈円が和歌で仏教的世界と現実世界を重ねていくことの意味を論じ、中世を代表する三人の歌人の和歌を詠む態度を具体的に闡明した意義は大きく、そのような態度の中から和歌表現は深められ、そこから「煩惱即菩提」「生死即涅槃」に近づくことが志向されていると言う指摘は、中世和歌の展開を考える上での重要な内容であることは間違いないのであろう。

また、第三部は煩惱即菩提を表すような仏教語を表面化せず、その歌に釈教

歌的性格が十分に認められることを論じるものであるが、特に第四章「鏡にうつる心―『人の心のうち』を捉えること―」では、「月前野花」の歌を対象として、これが『聞書集』の安楽行品詠と同様に鏡への関心があり、月前の鏡に映し出された花の色は虚像であり、それは映し出されることで存在するものであること、ここには『摩訶止観』の〈中諦〉が想定されること、これに対して「安楽行品」詠は、〈仮諦〉を否定する〈空諦〉に「仏の悟り」を留めないために、〈中諦〉を示す「鏡」において詠出しようとしていることを論じ、このことから、「鏡」は〈中諦〉、「花の色」は〈仮諦〉、「悟り」は〈空諦〉を示すのであると指摘する。論証も丹念であり、西行和歌の姿を取り出している。また、第五章の「跡なき心」の論は、西行晩年の無動寺での歌を沙弥満誓の歌の享受史を通し、ここには無常観から空観へと展開している西行和歌の深まりが認められ、これを西行晩年の一つの達成と見る。これらの論は、西行和歌の具体的な分析に基づいているものであり、仏教思想の把握も正当であり、導かれた結論も妥当であろうと思われる。

本論文が目指した西行和歌論は、根本的には西行の歌に二重性を讀もうとするものであり、仏教思想を詠んだ歌には和歌的論理を、和歌的な論理に従った自然詠にはその背後に仏教思想を想定しようとするものである。そのため、和歌の読解が時に「深読み」に陥る嫌いが無いとは言えない。しかしまだ多くの課題を残しながらも、ここに描き出された西行和歌の像が、全体として意義あるものであることは確かである。本論文はその目的のために、できる限り客観性を保とうと努力しており、多くの類例から解釈を下そうとし、仏典の引例もなるべく西行が実際に眼にしたであろうものから立論し、また当時の理論的解釈のあり方に留意するなど、周到な操作が見られる。こうした作業の結果として、新見も随所に見られるのであり、今後もこれらの論文を基本としてさらに新たな展開をもたらす力があると判断される。よって本論文の提出者荒木優也は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

平成二十六年二月十五日

主査 國學院大學教授 辰巳正明 ⑩

副査 國學院大學准教授 谷口雅博 ⑩

副査 お茶の水女子大学教授 浅田徹 ⑩